

地方に暮らす若者の意識

地方中枢拠点都市と周辺部の比較から

吉備国際大学社会科学部准教授 轡田竜蔵(くつわだ・りゅうぞう)

kutuwada@mve.biglobe.ne.jp

報告の趣旨

- ・報告者が実施した「**広島20-30代住民意識調査**」(**公益財団法人マツダ財団委託研究**)をベースにし、その結果を紹介しつつ、現在の**日本の地方圏に暮らす若者たちに関するいくつかの論点**について、知見を提出する。

- ・「**広島20-30代住民意識調査**」

質問紙調査・・・2014年7月実施。住民基本台帳からのサンプリング。郵送調査で867票を回収。轡田が執筆した報告書＜統計分析篇＞(2015年7月刊行)は紙媒体のほか、マツダ財団ホームページで全文公開した。

<http://mzaidan.mazda.co.jp/publication/index.html>

インタビュー調査・・・2014年8月～現在。50余名に実施済み。質問紙調査と同様の調査を実施後、その回答理由を2時間程度インタビュー。その結果を含む報告書は近刊予定。

問題意識

●大規模な総合調査を通して「地方の若者」に焦点を当てる。質問紙の内容は、生活、仕事、地域、社会、人生の5テーマについての112の意識調査項目、居住や生活の実態に関わる34の実態調査項目からなる。

⇒「大都市圏」に偏りがちな若者調査(学生調査になりがち)からは見えにくい問題を扱いたい(地域特性、居住歴の違い等)。

●若者と言っても、20-30代と調査対象を広くとり、特に「ポスト青年期」(ライフコース上の「自立」を達成するために、地域移動をはじめ、さまざまな選択肢に向き合っている年代)における意識・実態の分化について捉えたい。

⇒地方創生に関わる議論のなかでも焦点化されている、「地方暮らし」のメリット・デメリットについての仮説・俗説を検証したい。

調査地の選択

- 日本の「地方の若者」についての一般的な議論に資することを意識し、広島県内の「安芸郡府中町」と「三次市」の二か所で調査を実施。
- 府中町・・・東西南北を広島市に囲まれる。東の傾斜地には高度経済成長期に造成された郊外住宅地が広がる一方、西の平地部には広島都市圏の最大の商業施設である「イオンモール広島府中」(約200店舗)が立地する。「地方中枢拠点都市」(三大都市圏以外、人口20万以上、昼夜間人口比率1以上の都市)の地域環境の典型。
- 三次市・・・広島都市圏から車で約1・5～2時間。中国山地に位置する県北の「中心市」。直径3キロ四方ほどの中心市街地に生活インフラが集中し、その他の大半が山林と農山村。「地方中枢拠点都市」と雇用圏や平日生活圏が重ならない、地方の「周辺地域」の典型。

府中町と三次市



広島駅前から府中町方向
(丘陵に立地する住宅地)



イオンモール広島府中 (府中町西部)



丘陵地のニュータウン (府中町東部)



三次市中心市街地



三次市周辺部（三次市
の大半は農山村地域）



基本データ(1)人口動態

●人口動態

【現況(標本抽出時点2014年6月1日)】

- ・府中町は人口51,655人、面積10km²。社会増があり、当面は横ばい。数年後に人口減少期に突入する予測。
- ・三次市は人口55,615人、面積778km²。自然減・社会減ともにあり、既に人口減少期に突入。

【2040年(社人研推計)】

- ・標本抽出時点と比べて、府中町は68.3%、三次市は65.4%と激減。全国の80.9%より減少率が大きい。
- ・ただし、20-30代人口比率については、府中町が24.5%⇒21.8%、三次市が19.0%⇒18.3%と微減にとどまる。全国の下げ幅(23.0%⇒19.3%)よりむしろ少ない。

基本データ(2) 「地元」居住率

A) (配偶者あり)親または配偶者の親と同居、または1時間以内に近居～府中町66.3%、三次市84.3%

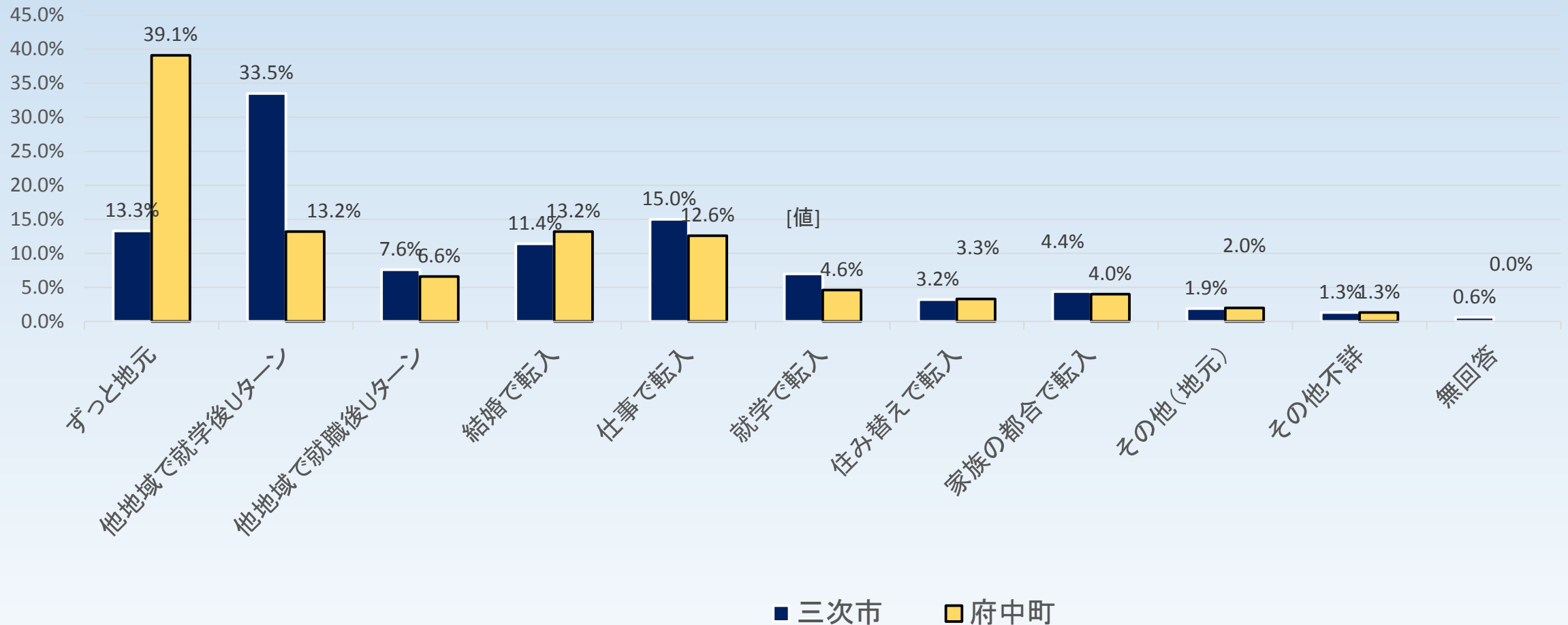
B) 親と同居、または1時間以内に近居～府中町64.8%、三次市70.3%

C) 「地元に住んでいる」と回答～府中町44.1%、三次市52.3%

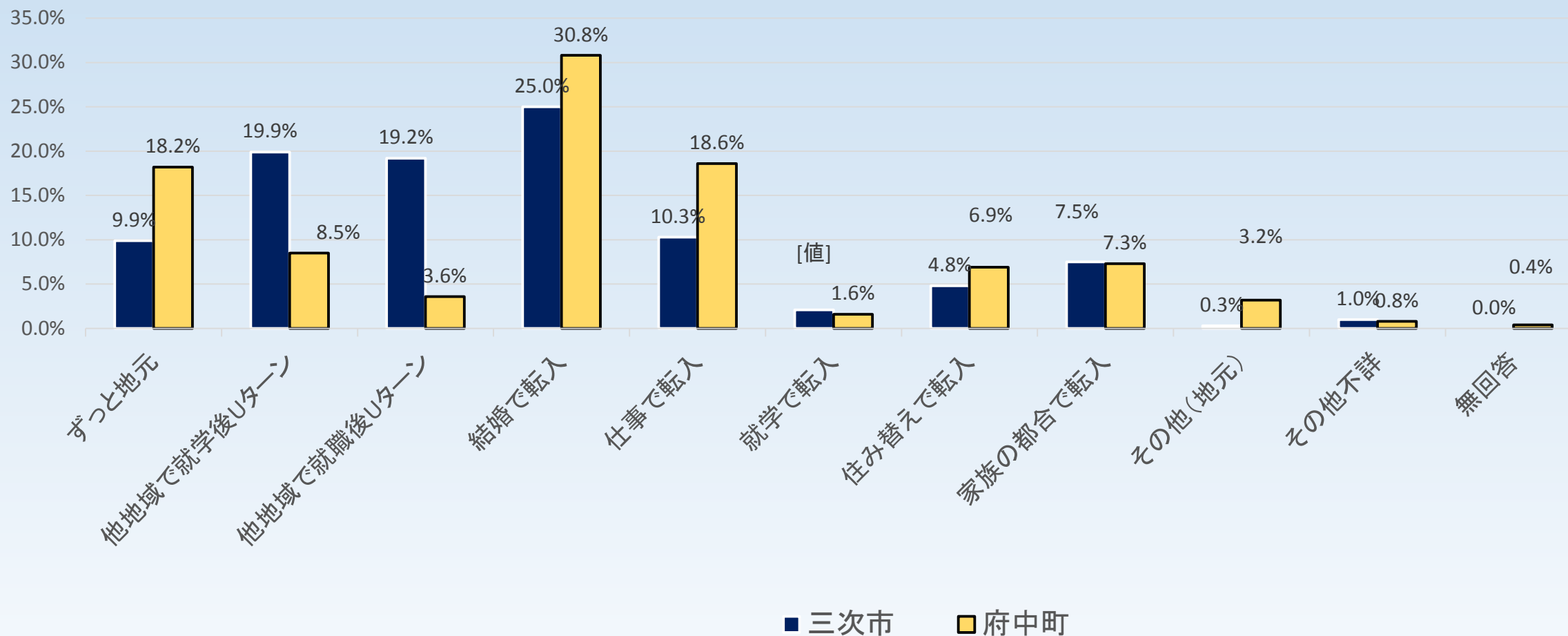
D) 「ずっと地元」と回答～府中町25.7%、三次市11.2%・・・三次市は通学圏に高等教育機関が乏しく、進学時に相当の割合が地元外(最も多くは広島都市圏)に転出する。府中町は広島都市圏の大学はすべて通学範囲。

#A)～D)の比率にギャップがある理由。①主観的「地元」定義は、親と同居または隣居のばあいに限られる傾向が強い。②主観的な地元定義が市町村よりも狭い範囲である者が府中町32.4%、三次市34.4%と多い。

基本データ(3) 居住歴【20代】～府中町は「ずっと地元」、三次市は「就学後Uターン」が多い。

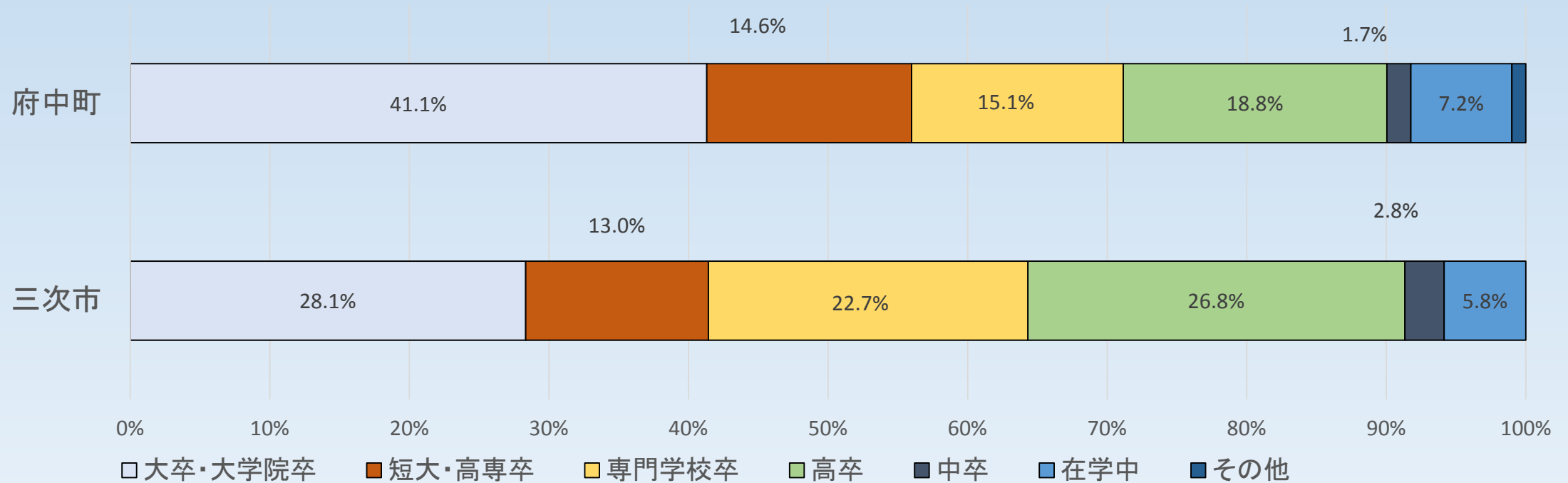


基本データ(3) 居住歴【30代】～府中町は「結婚や仕事のため転入」、三次市は「Uターン」が多い。



基本データ(4)学歴【20-30代】

～高学歴傾向の府中町、低学歴傾向の三次市



- ・「ずっと地元」・・・府中町では「大卒以上」36.5%で「高卒」16.3%、三次市では「高卒」57.7%で「大卒以上」9.6%。両自治体の学歴比率がまるで異なっている。
- ・「他地域で就学後Uターン」・・・府中町では「大卒以上」53.5%、三次市では「大卒以上」40.2%といずれも比較的高学歴。

基本データ(5)雇用【20-30代】

- ・府中町は、マツダ関連会社が多いために、男性の製造・労務作業従事者が28.4%と多め。その一方、企業城下町というよりは、**広島都市圏のベッドタウンとしての性格が強く、業種・職種の多様性が大きい。**
- ・三次市は地場産業が弱く、大規模工場が立地しないために製造業の雇用が少なめで、**「医療・福祉」「卸売・小売」などの対面型サービスが雇用の核。**職種でもサービス職が17.3%と多い。大半が農山村であるが、農林漁業従事者は2.6%のみ。
- ・専業主婦比率(30代)(府中町**39.9%**、三次市24.3%)
- ・男性正社員のうち製造業比率(府中町**40.9%**、三次市25.3%)
- ・女性正社員のうち医療・福祉比率(府中町37.2%、三次市**53.3%**)

基本データ(6)収入

～府中町は全国平均水準、三次市は低い水準

- ・平均世帯年収

～住宅・土地統計調査(2013年度)に基づく推計

府中町466.3万円 三次市407.5万円(全国464.2万円)

～20-30代調査(グループ化中央値)

府中町525万円 三次市469万円

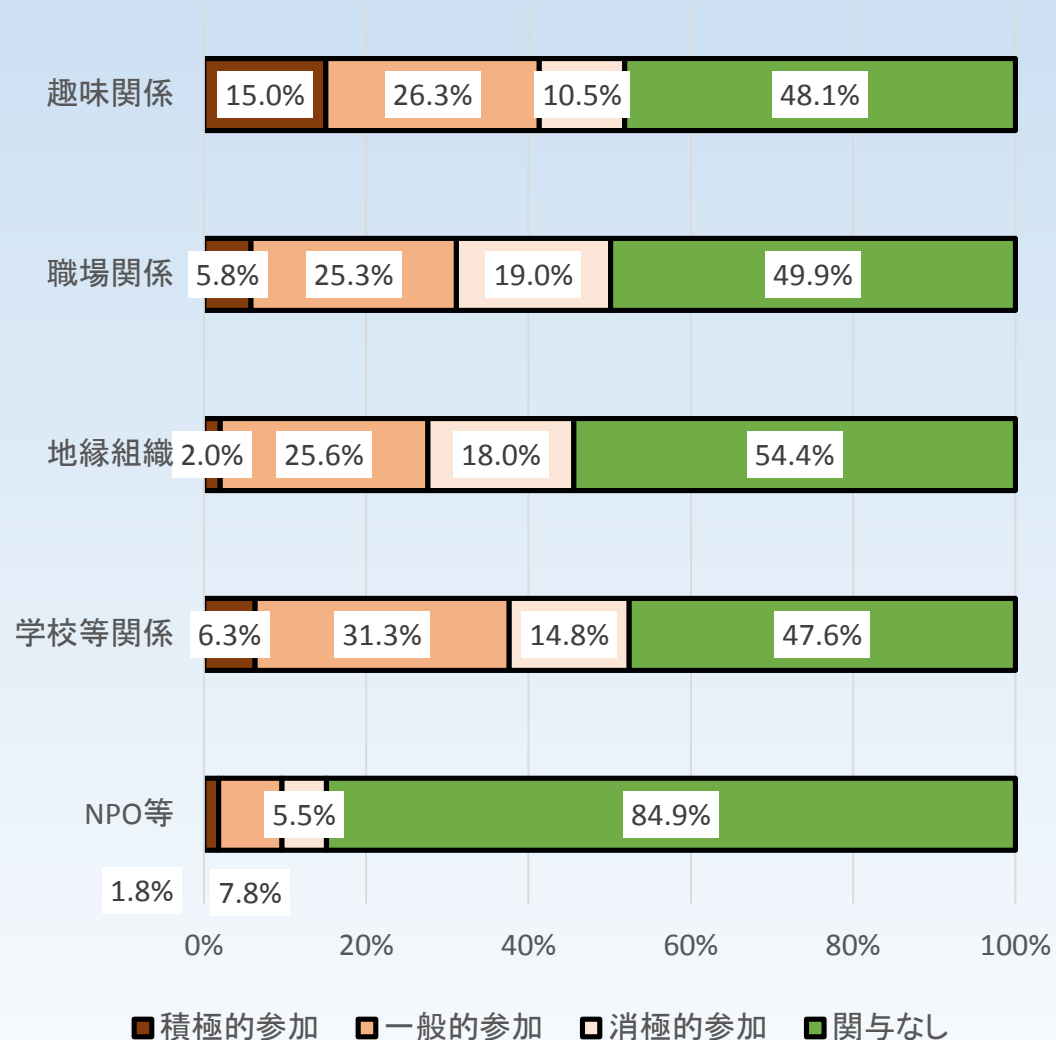
- ・世帯年収1000万円以上(20-30代) 府中町4.4%、三次市4.5%

- ・世帯年収400万円未満(20-30代) 府中町29.8%、三次市41.5%

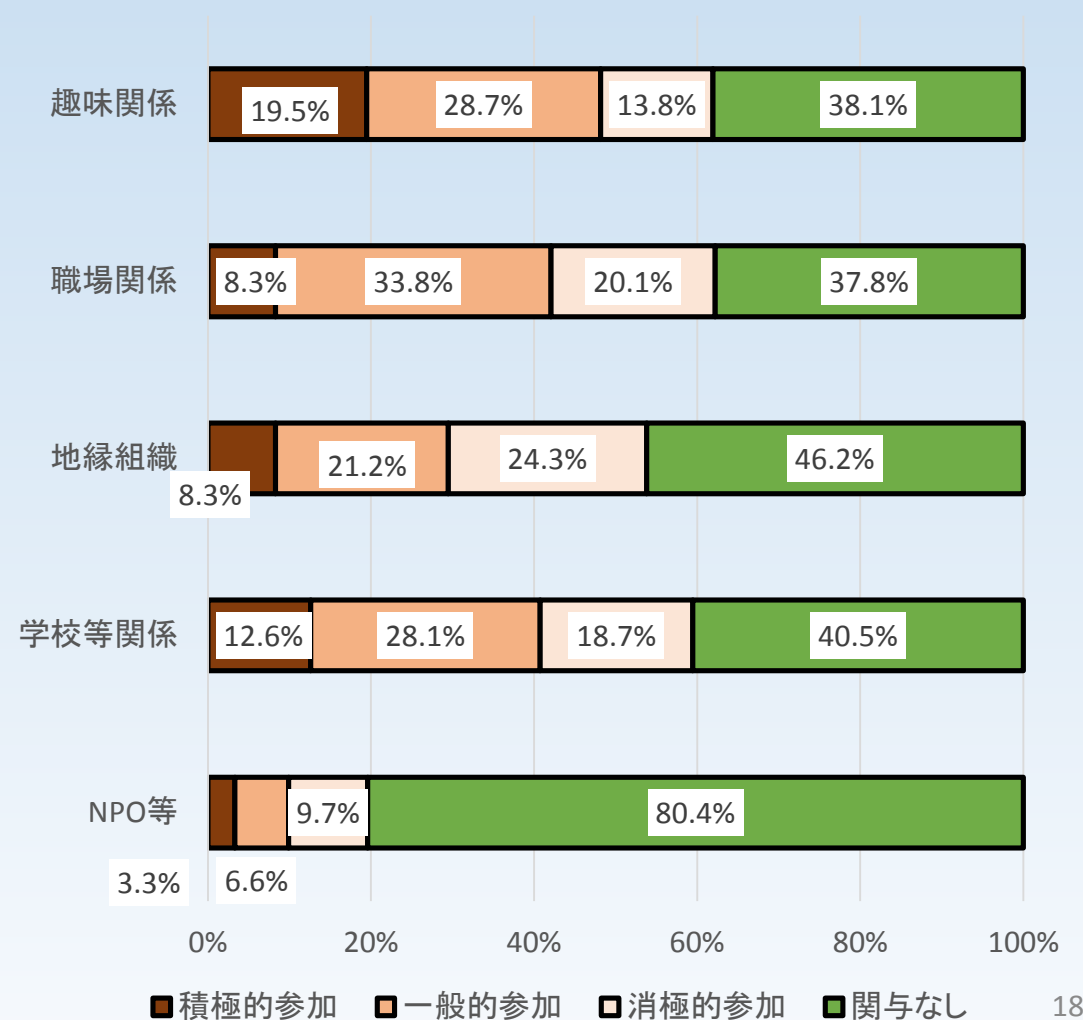
基本データ(7)地域活動・社会活動への参加度

～何らかの活動に「積極的」な人たちの比率は、三次市(34.3%)のほうが府中町(25.7%)より多い。

府中町



三次市



論点1 地方は大都市よりも仕事が楽？⇒No

●経済面での現状評価・将来展望の厳しさ

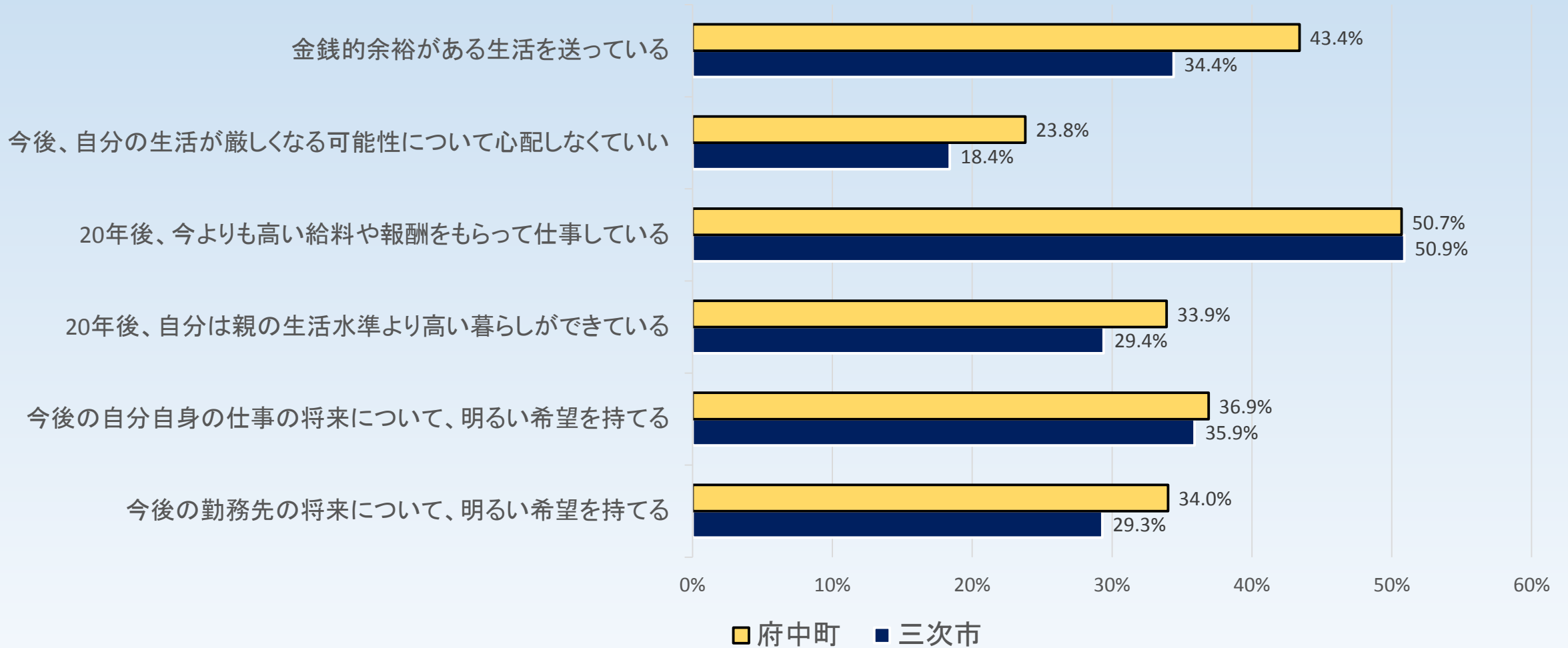
・ほぼ全業種・全職種について「仕事の将来に明るい希望」がないと回答する傾向があり、**右肩上がりの将来展望を描いている者は少ない**。現在の有業者のうち「20年後は、今よりも高い給料や報酬をもらって」いると考える人は約半数のみ。正規雇用でも男女とも何とか過半数という程度（府中町58.6%、三次市55.7%）（表1－1）

●「地方は大都市より仕事が楽」とは決して言えない

・**週超60時間就労の男性の比率**が高い（府中町25.3% 三次市22.2%）。

⇒小規模事業所における「**人手不足**」にともなう長時間労働など、地方に目立つ労働問題に着目する必要（三次市では「自営業・家族従業員」の男性の52.2%が就労時間週60時間以上）。

表1－1 仕事の将来展望、経済的な現状評価 は厳しい



論点2 女性が子育てしながらキャリアを継続するうえで、地方暮らしにメリットはあるのか？

⇒ Yes & No

- ・女性についていうと、三次市のほうが、府中町よりも「仕事満足度」が高いことに注目できる。正社員の有配偶率、子どもがいる者の比率も多い。専業主婦率も少ない府中町。(表2-1)
- ・背景には親への依存がある。三次市では親(あるいは配偶者の親)と同居または近居(1時間以内)している割合が高い。それと表裏一体で、「親から自立していない」と考える30代の比率も高い(表2-2)
- ・地元居住には、自分の親または配偶者の親のサポートを得られるというメリットがあり、これは仕事と子育てを両立したい女性にとってプラスに働く。だが、それは家族資源に頼ることのできる「地元居住者」と、頼ることのできない「非地元居住者」との格差を照らし出す。

表2-1 就業継続する女性をめぐる環境 ～三次市のほうにアドバンテージ？

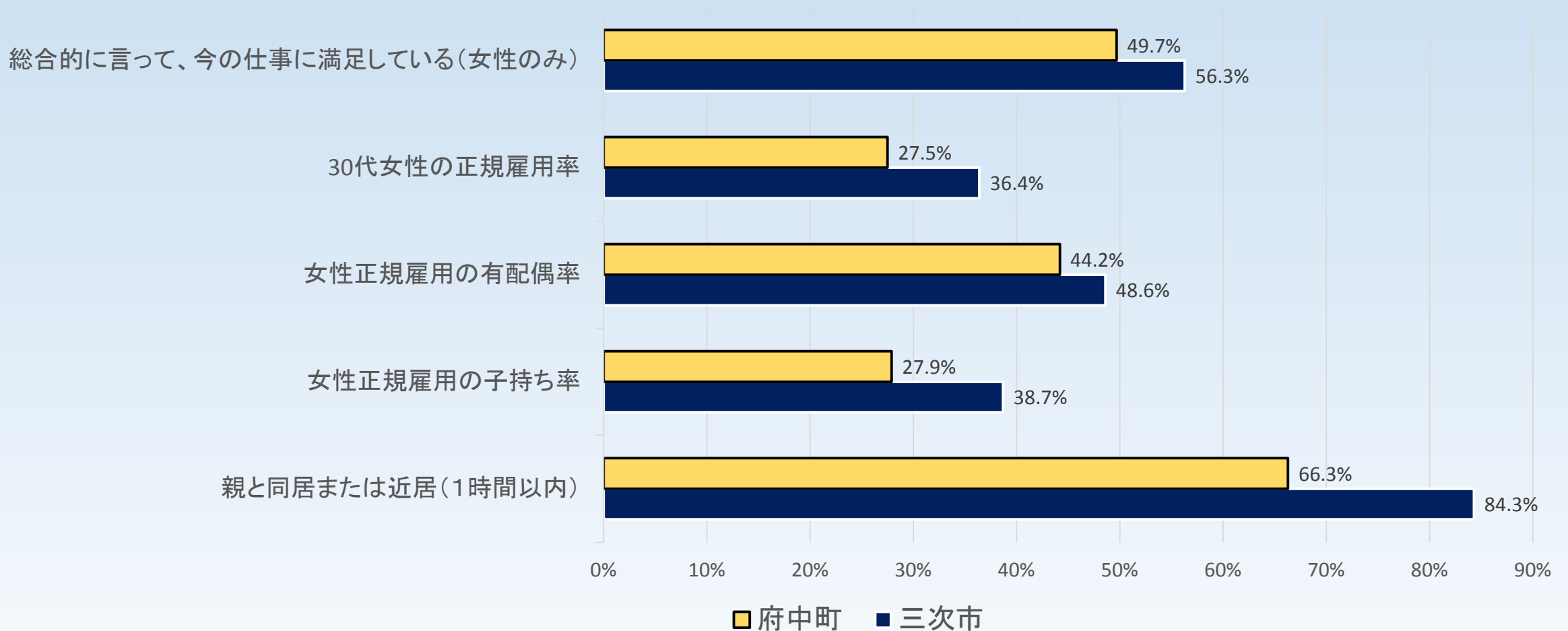
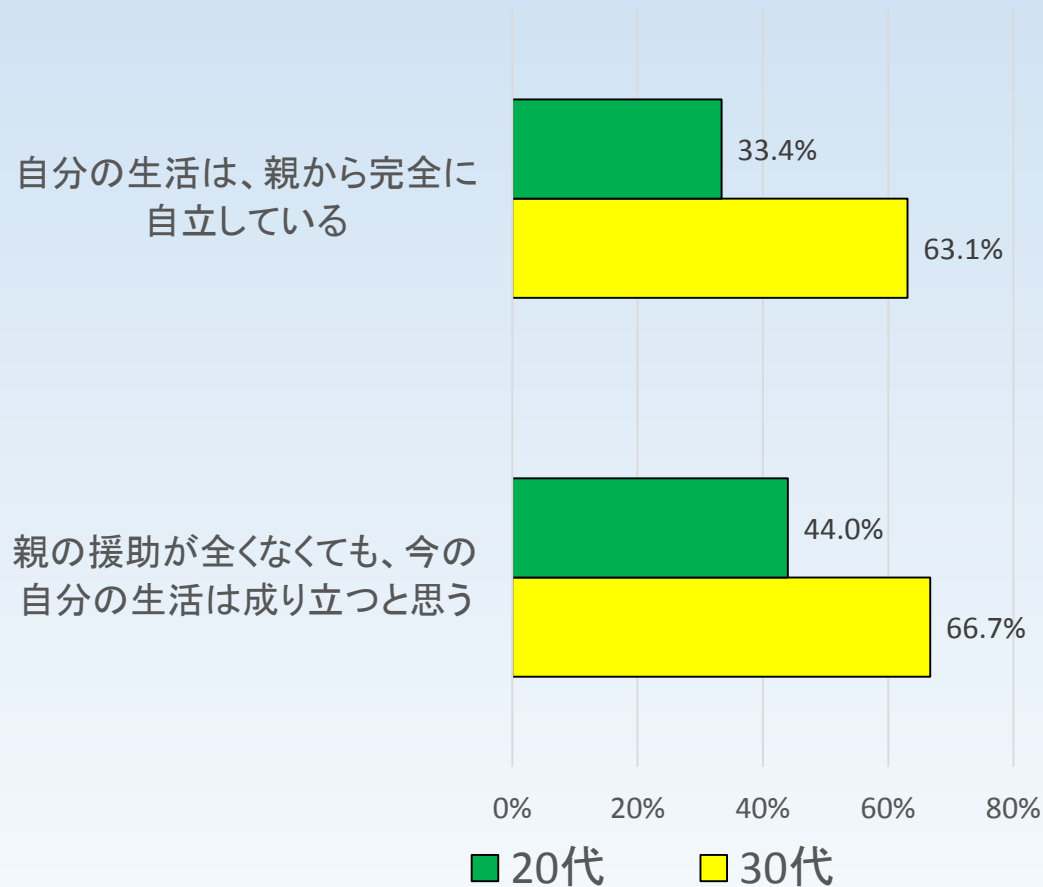
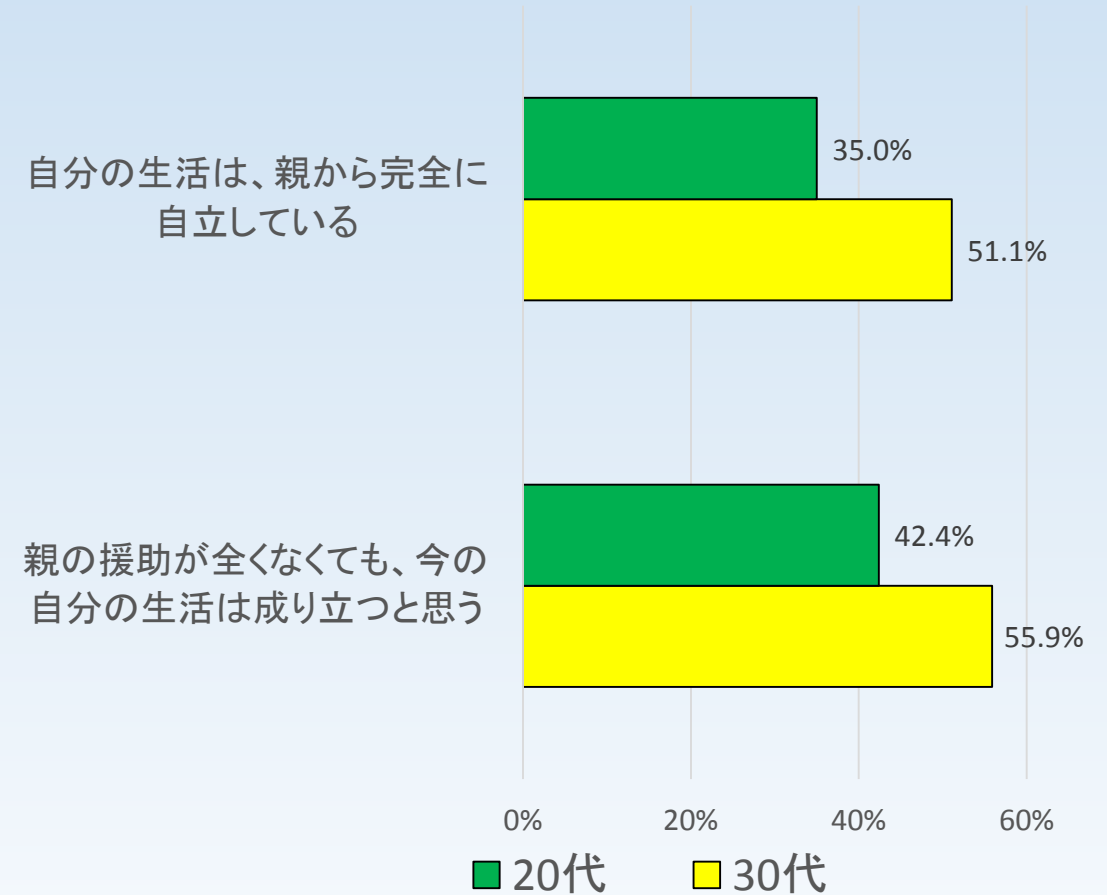


表2ー2 親への依存は30代・子持ちでも続く 三次市＞府中町。子育てや、女性の就労継続における依存 度の高さを反映？

府中町



三次市



論点3 地方の若者は、地方の消費環境に (過剰)包摂されている？⇒Yes, But...

- イオンモールのお膝元である府中町は「地域満足度」が89.8%ときわめて高い。「地域満足度」は、経済階層や社会的属性によらず、何よりも、ほぼ地域の消費環境へのアクセス格差によって決定される。(表3-1)
- 一生暮らす場所として「中国山地のような田舎」を好み、「東京のような大都市」「広島のような地方都市」を嫌う人は、三次市でも2割台と少数派。他方、「大都市」志向が強く、「田舎」も「地方都市」も嫌いという人もわずかで、多くは「地方都市」志向。(表3-2)
- しかし、消費社会的な価値観で決まる「地域満足度」が高ければ、それでいいのか。過剰なまでの「満足度」の高さは、地域社会や日本社会の「他者」や「弱者」への感度の低さに繋がっていないか。

表3－1 地域の消費環境・生活環境への評価

～府中町＞三次市。地域満足度に経済階層は説明力を持たず、地域差そのものによってほぼ説明可能。

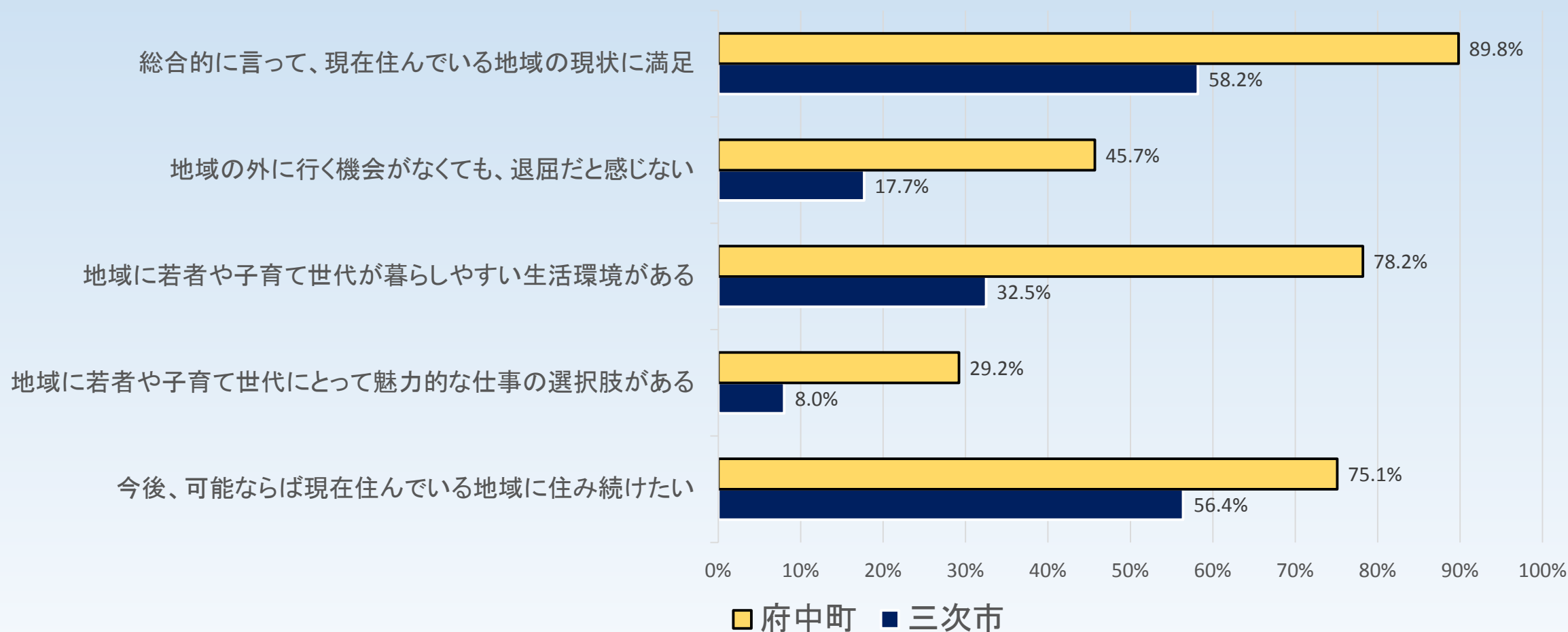
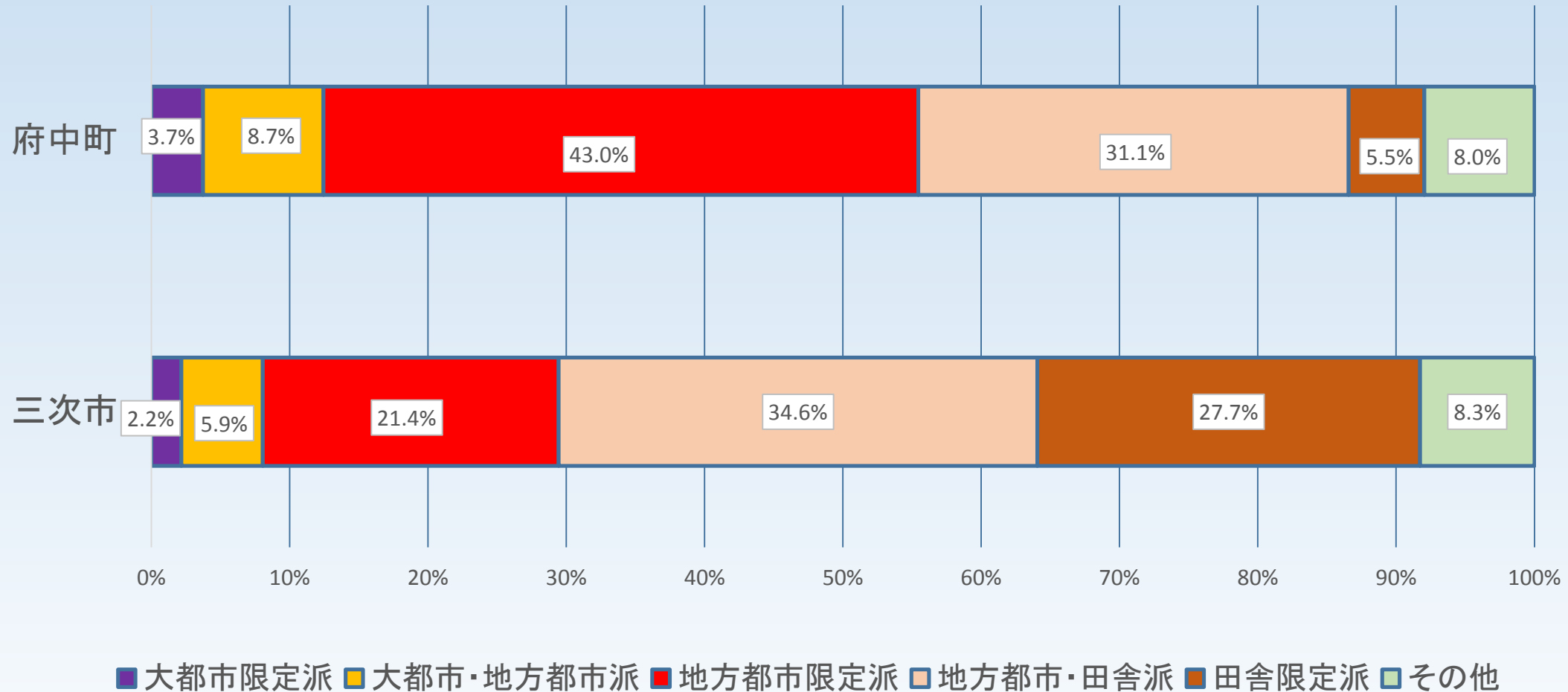


表3-2 府中町は地方都市限定派、三次市は地方都市・田舎派が最多

(「一生住む場所」として「いいと思う」環境。「中国山地のような田舎」「広島のような地方都市」「東京のような大都市」についてそれぞれ尋ねた。)



論点4 人口減少が進む地方周辺部の満足度の低さは、憂えるべきか？ ⇒ No

- ・たしかに消費環境格差を反映し、「地域満足度」は、府中町のほうが三次市よりも圧倒的に低い。だが、その一方で、「生活満足度」などの現状評価については、両自治体の差は無い。(表4-1) **「地域満足度」の低さを埋め合わせているのは、三次市の若者のモビリティの高さ。**三次市の若者の7割は、休日には住んでいる地域の外に出かけたいと考えており、移動範囲は2時間先の広島都市圏に及ぶ。(表4-2)
- ・**「Uターン層を中心とした地域外での生活経験がある人々」のモビリティ**は特に著しく、地元と地元外のネットワークを結びつけるハブとしての役割を果たしている。特に三次市で多い「他地域で就学後Uターン」した層。交友関係が広いために、「ずっと地元」にいる人々よりも各種満足度が高い。(表4-3)・・・三次市の過疎の農村の事例。20代後半の同級生の大半が地域外に転出(半数以上は広島都市圏在住)しているが、Uターンした少数の者が核になったfacebookのコミュニティをベースに、地域イベントが活発に展開されている。

表4－1 各種の総合的満足度評価 ～地域満足度以外は両自治体の差はあまりない

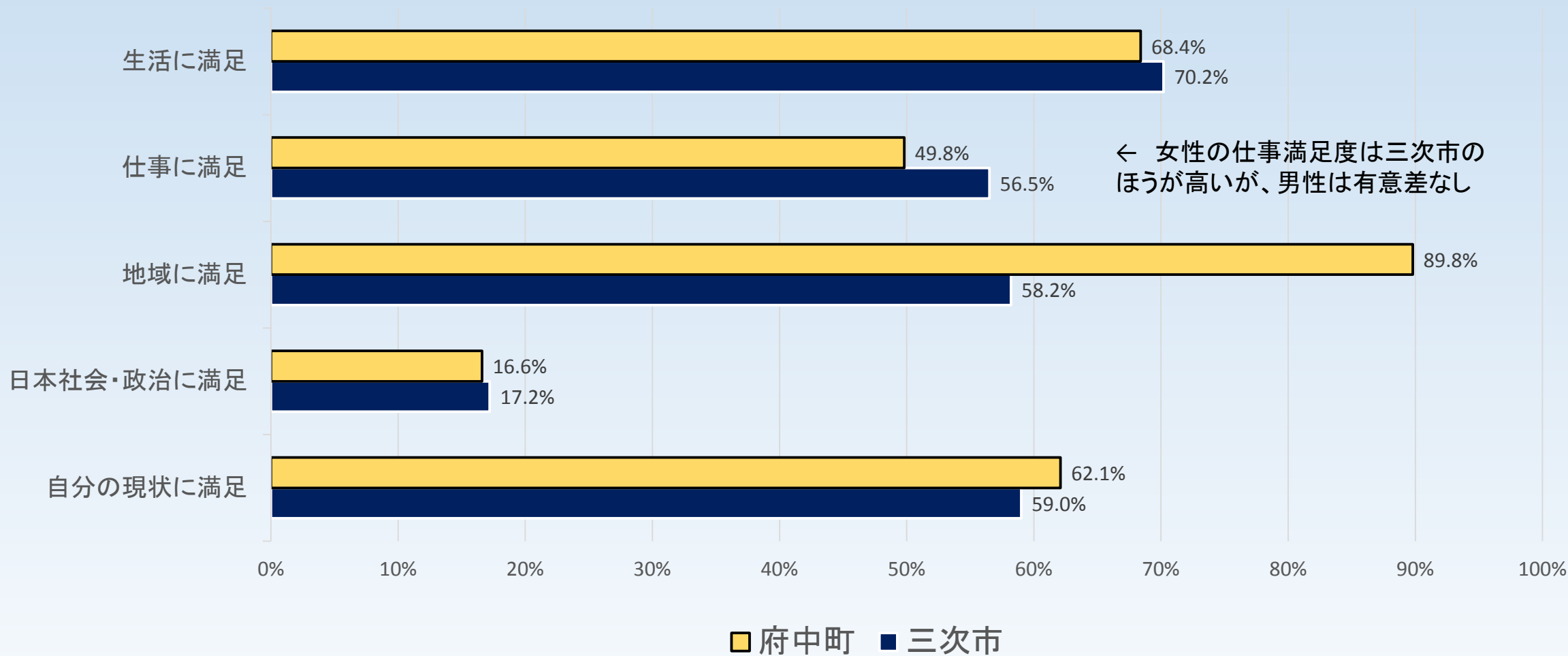


表4ー2 モビリティ感覚の地域差～三次市>府中町。特に地元以外の生活経験のある人のモビリティは高い。

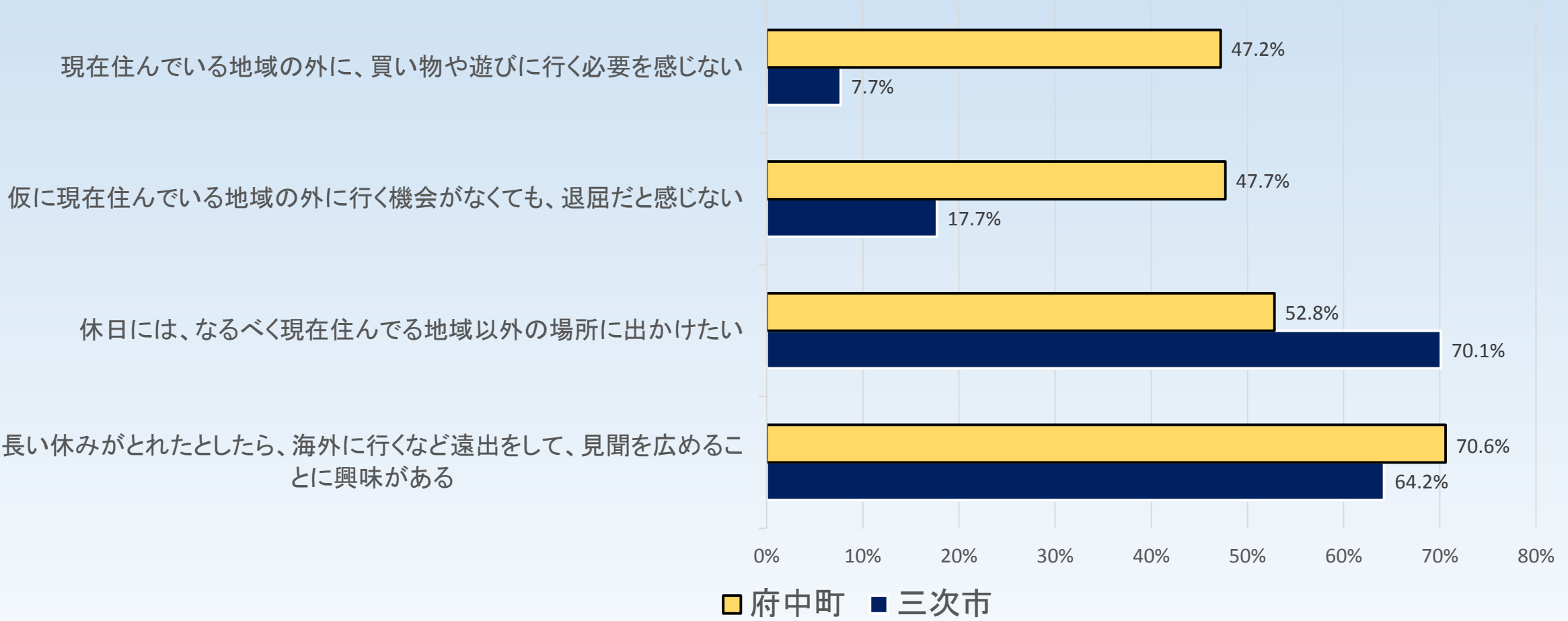


表4－3 「現在住んでいる地域にいる多様な人 たちと交流することに関心がある」× 居住歴

～興味がある「Uターン」層と関心の薄い「ずっと地元」層

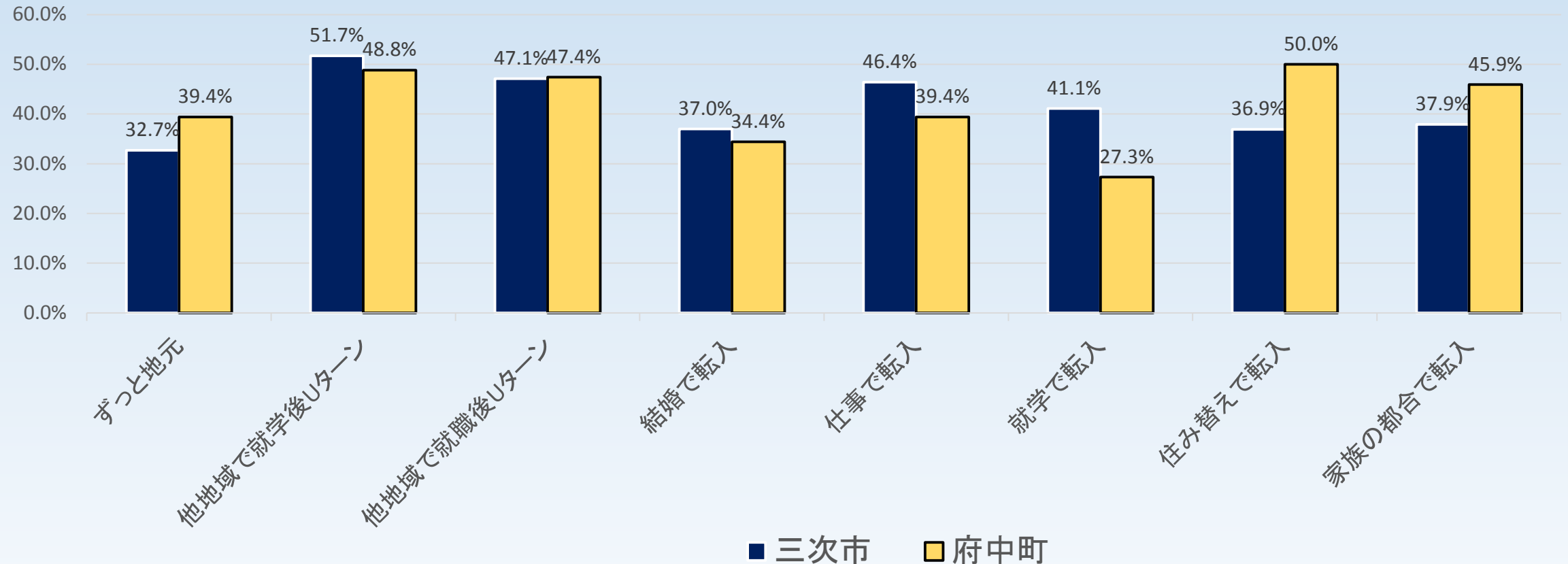
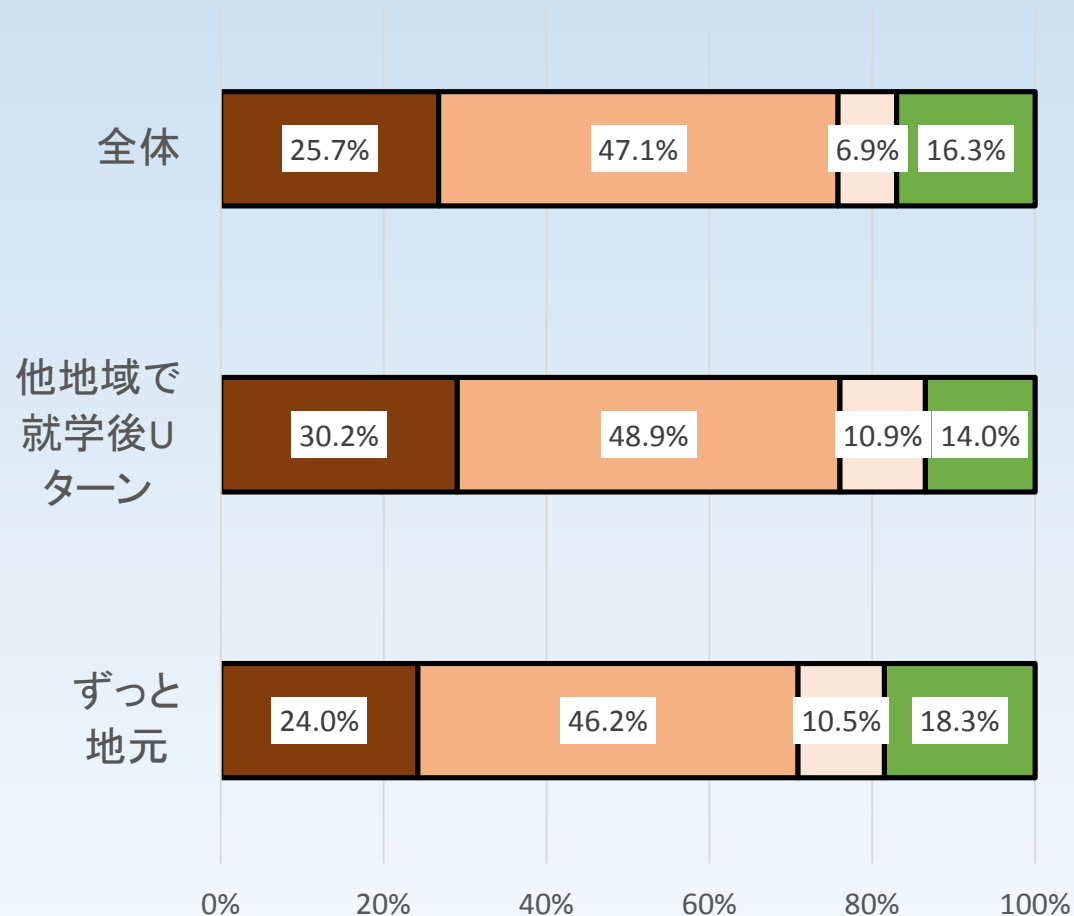
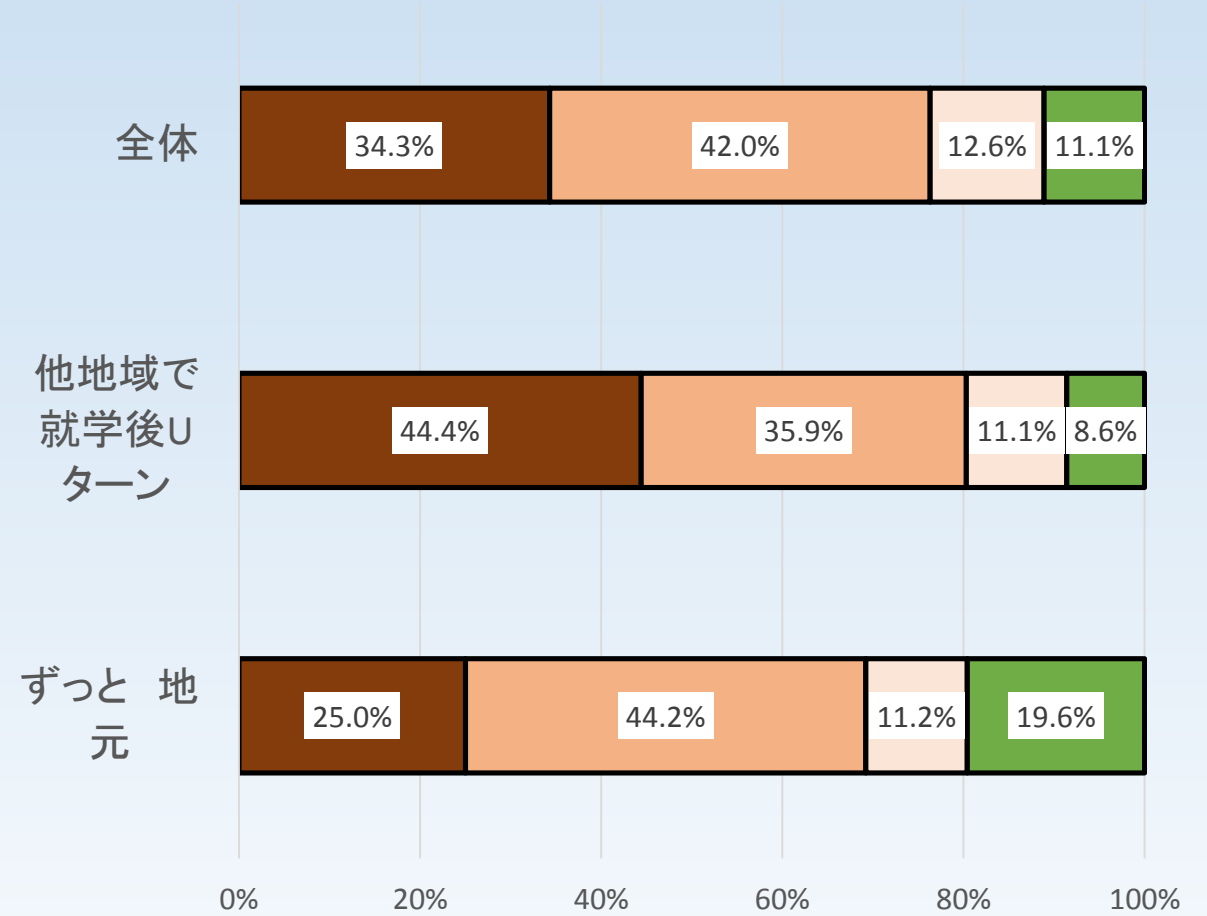


表4-4 地域活動・社会活動への参加 ～「他地域で就学後Uターン」は活発、「ずっと地元」は不活発

府中町



三次市



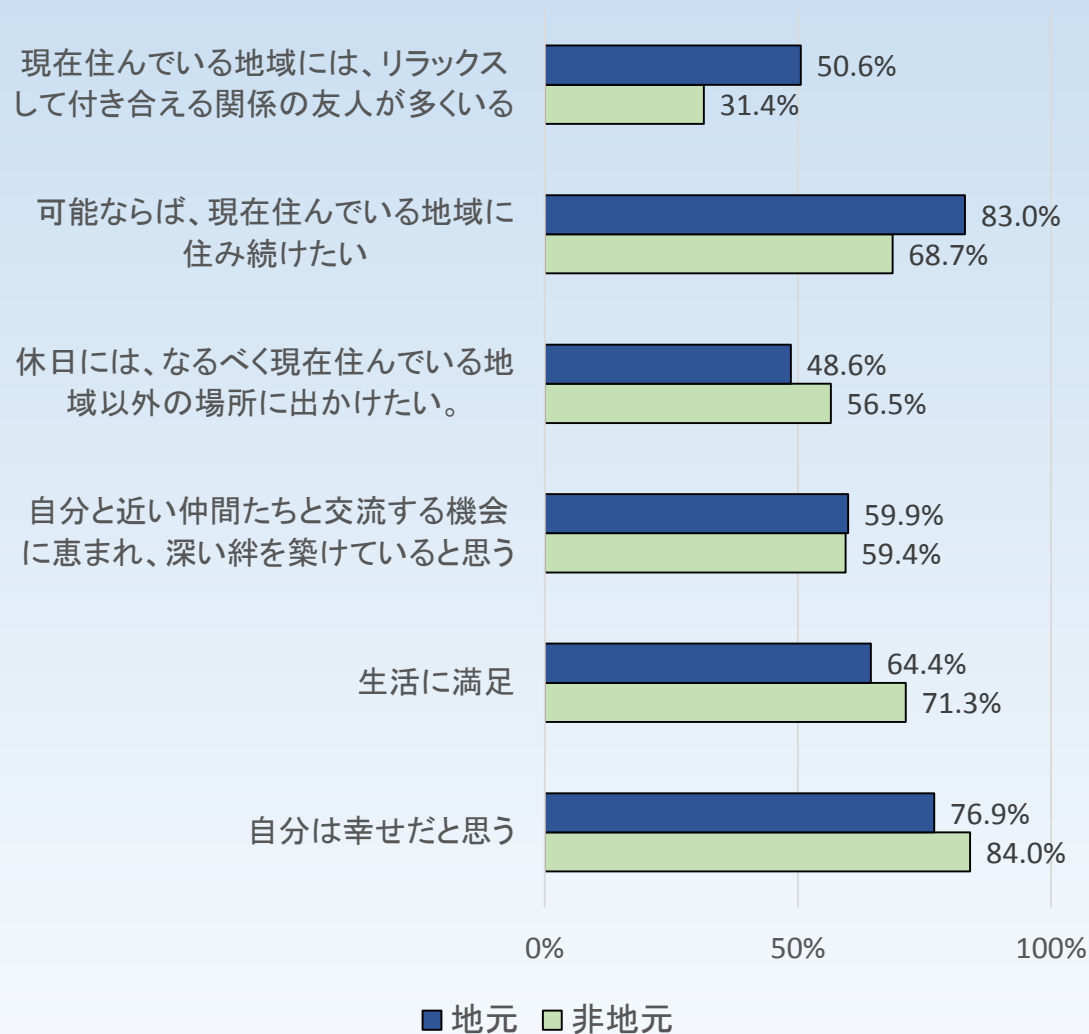
論点5 「地元在住」の若者たちは、「地元外在住」の若者たちよりも満足度の高い暮らしを送っていると言えるのか？ ⇒ Yes & No

- ・今住んでいる場所が「地元」である人は、「地元外」の人よりも、今住んでいる地域の現状評価は総じて高く、特に地域の人間関係についての満足度が高い。

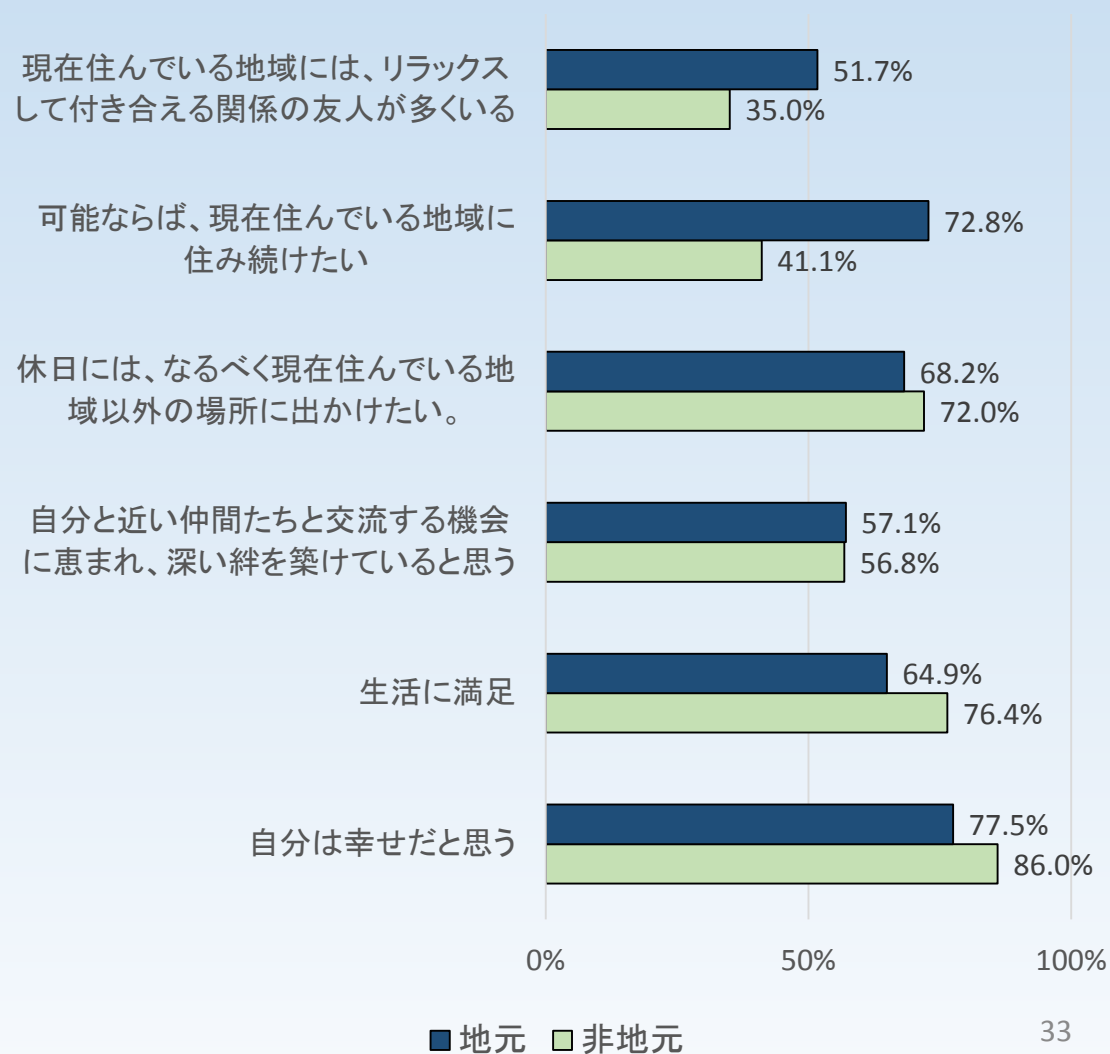
- ・ただし、住んでいる地域に限らず、交友関係の総合的評価に関わる質問においては、「地元」と「地元外」の有意差はない。「地元外」の若者はモビリティが高く、今住んでいる地域の外に人間関係が広がっているため。「生活満足度」や「幸福度」においては、むしろ「地元外」のほうが現状評価が高い。特に「ずっと地元」にいる者はネガティブ。(表5-1)

表5－1 地元在住／非地元在住の意識差

府中町



三次市



論点6 地域活動・社会活動への参加は、地方暮らしの満足度を高めるか？⇒Yes & No

- ・「地域満足度」を目的変数とした重回帰分析では、地域活動・社会活動への参加度には、ある程度の説明力がある。だが、「幸福度」ほか他の満足度についていうと、活動の種類によっては、説明力を持たない。
- ・地縁組織の活動⇒「地元」出身者の関与が強く、「非地元」は弱い。地域や国への愛着と結びつく。ただし、「生活満足度」や「幸福度」とは無関係。
- ・職場組織の活動⇒「仕事満足度」に対して説明力。同僚などの組織内コミュニケーションと関わり、「生活満足度」や「幸福度」(表6-1)や「自分の将来の希望」(表6-2)にも繋がるが、「差別や弱者」問題などの異質性への共感には繋がらない。(表6-3)
- ・趣味関係の活動⇒仲間集団に限らず、異質な人々の交流への満足度とも関係し、政治・社会参加への関心にも繋がる。「幸福度」(表6-1)や「自分の将来の希望」(表6-2)に繋がる。

表6ー1 「自分は幸せだと思う」×説明力のある
諸変数～趣味関係あるいは職場関係のグループ活動のポ
ジティブな作用

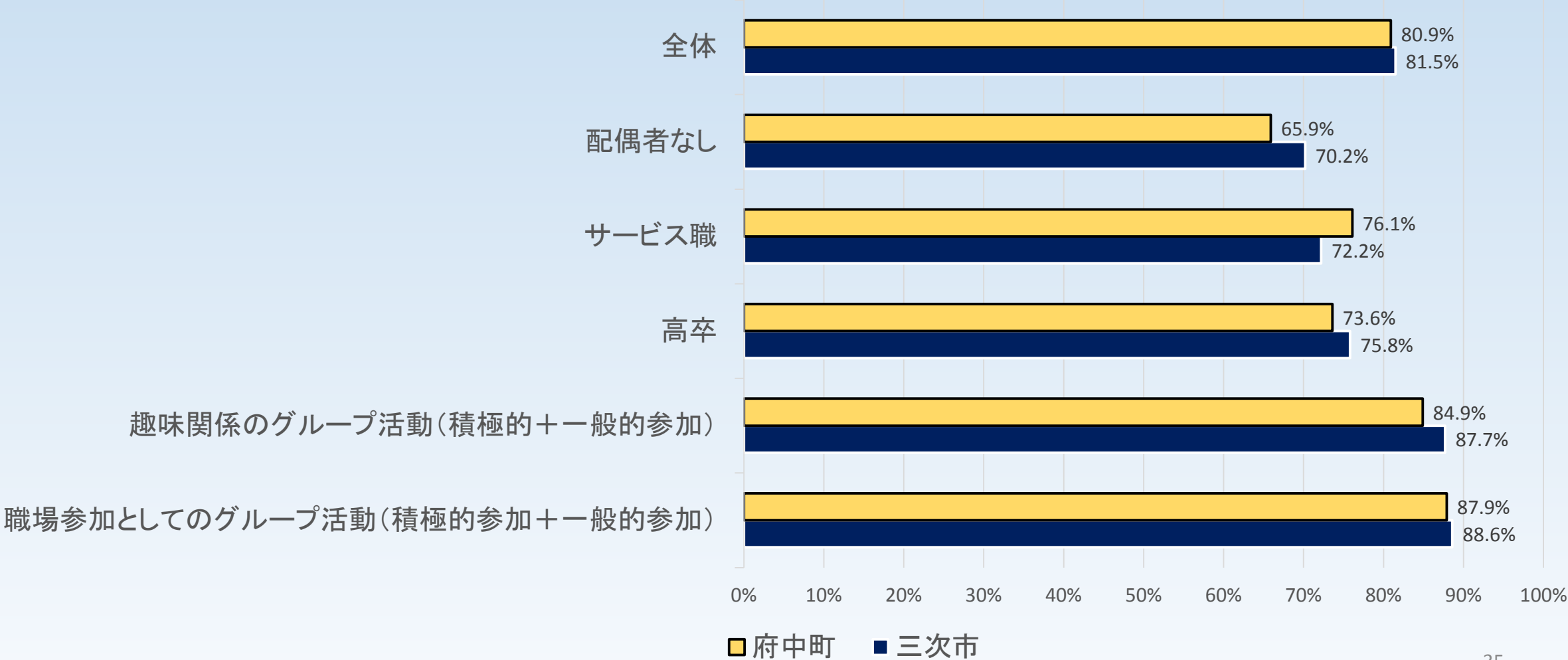


表6ー2 「自分の将来に明るい希望を持っている」×説明力のある諸変数～趣味関係あるいは職場関係のグループ活動のポジティブな作用

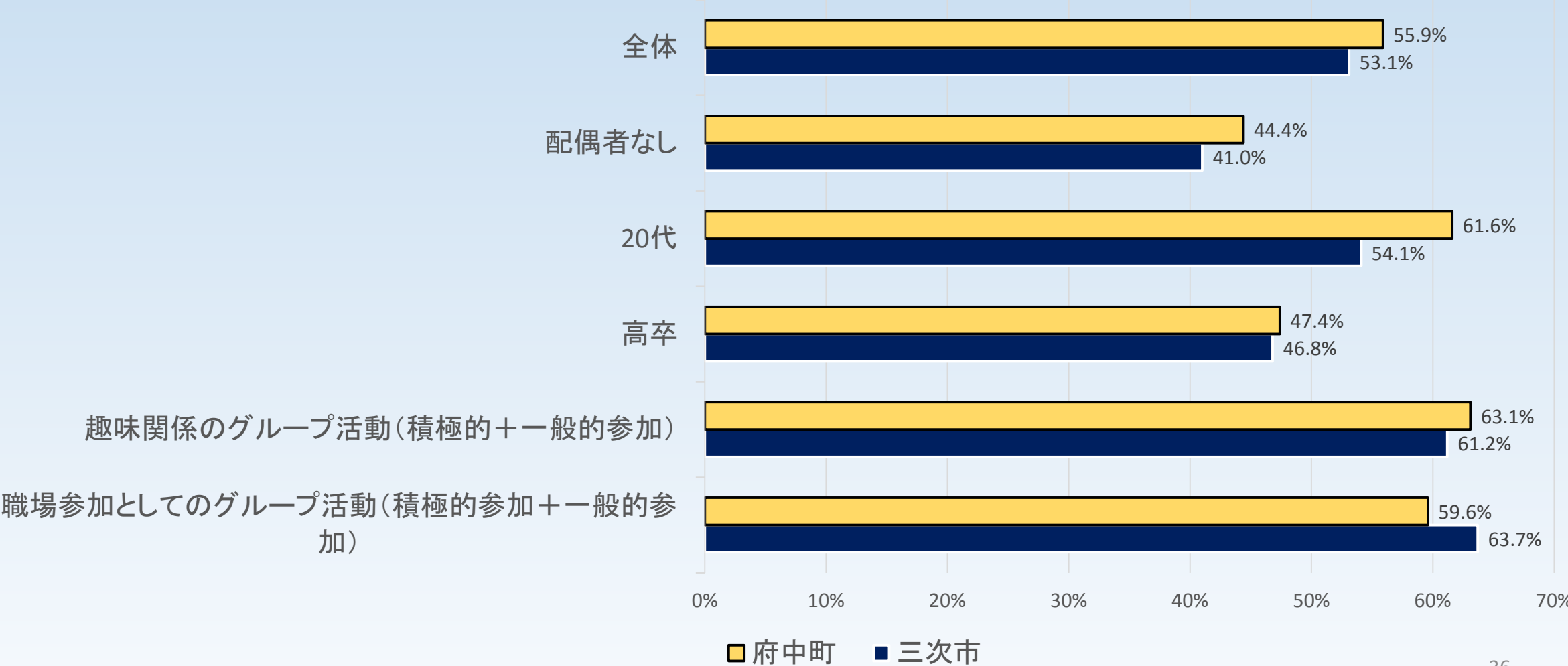
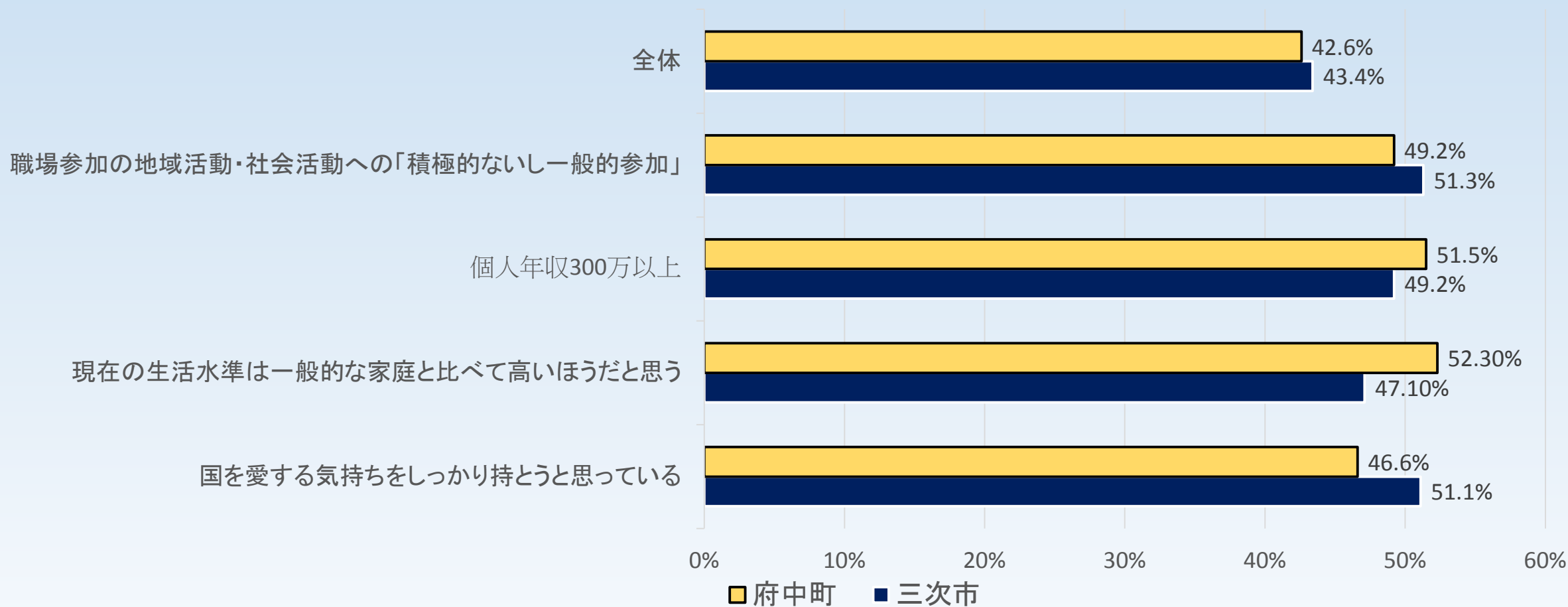


表6－3 「日本は、差別があまりなく、弱い立場とされる人たちがむしろ手厚く保護されている国だと思う」× 諸変数～マイノリティ問題への感度格差



論点7 地方に多い低収入・低階層な人たちは、上昇志向のないぶん、現状肯定的であるのか？

⇒ No, But...

- 社会経済的に厳しく、階層意識も低い「非正規雇用」(仕事が主、家事が主)と、「サービス」職従事者は、「生活満足度」(表7-1)ほか、各種満足度が低く、将来展望も暗い。社会意識としてもネガティブ(表7-2 「日本はこつこつと努力すれば成功する可能性がある国だ」に否定的)。社会経済格差から考えて逆転現象は存在しない。
- ただし、「階層上昇」が困難な状況にあって、階層格差には説明力がなく、人間関係などの生活のクオリティの充足感の格差による分化のほうが重要となる質問項目も多い。いわゆる「自己充足(コンサマトリー)」格差。例えば、「毎日の生活が楽しいと感じられる」かどうかについて、収入や雇用形態などは説明力を持たない。(表7-3)

表7-1 「総合的に見て、現在の生活に満足している」×説明力のある各変数

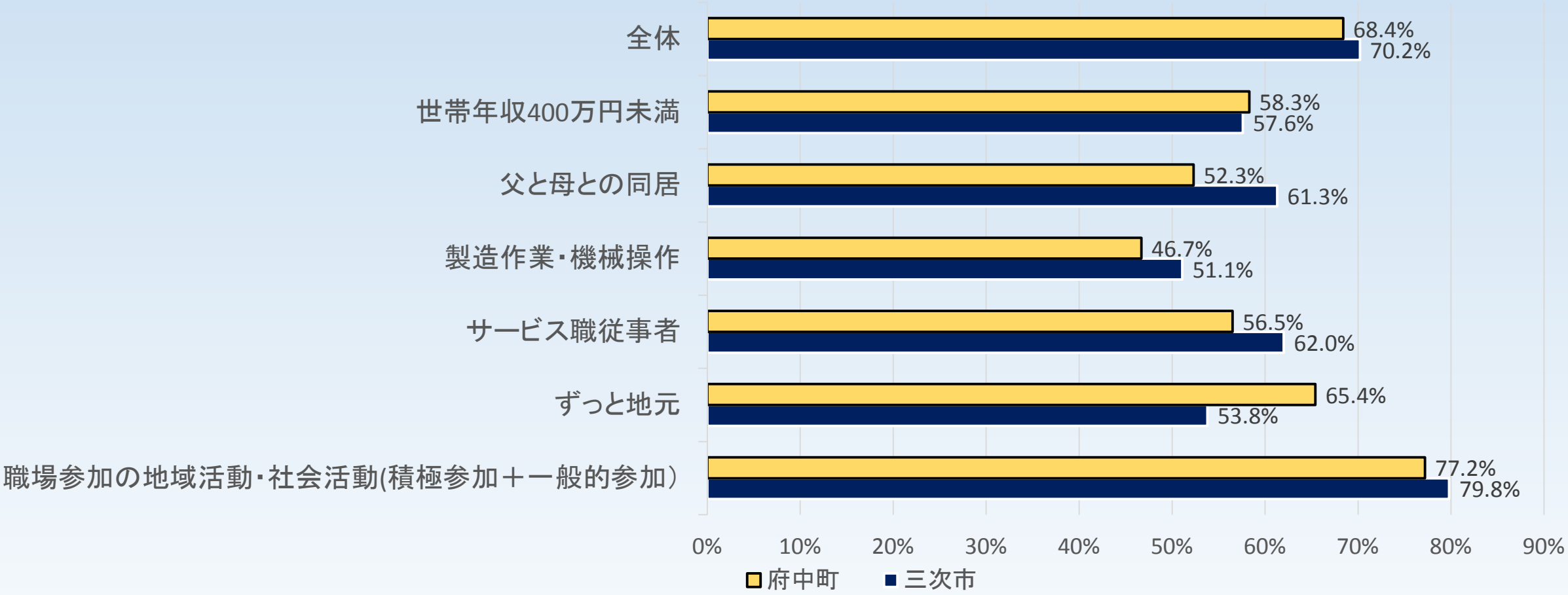


表7ー2 「日本はこつこつと努力すれば成功する可能性がある国だ」×説明力のある各変数

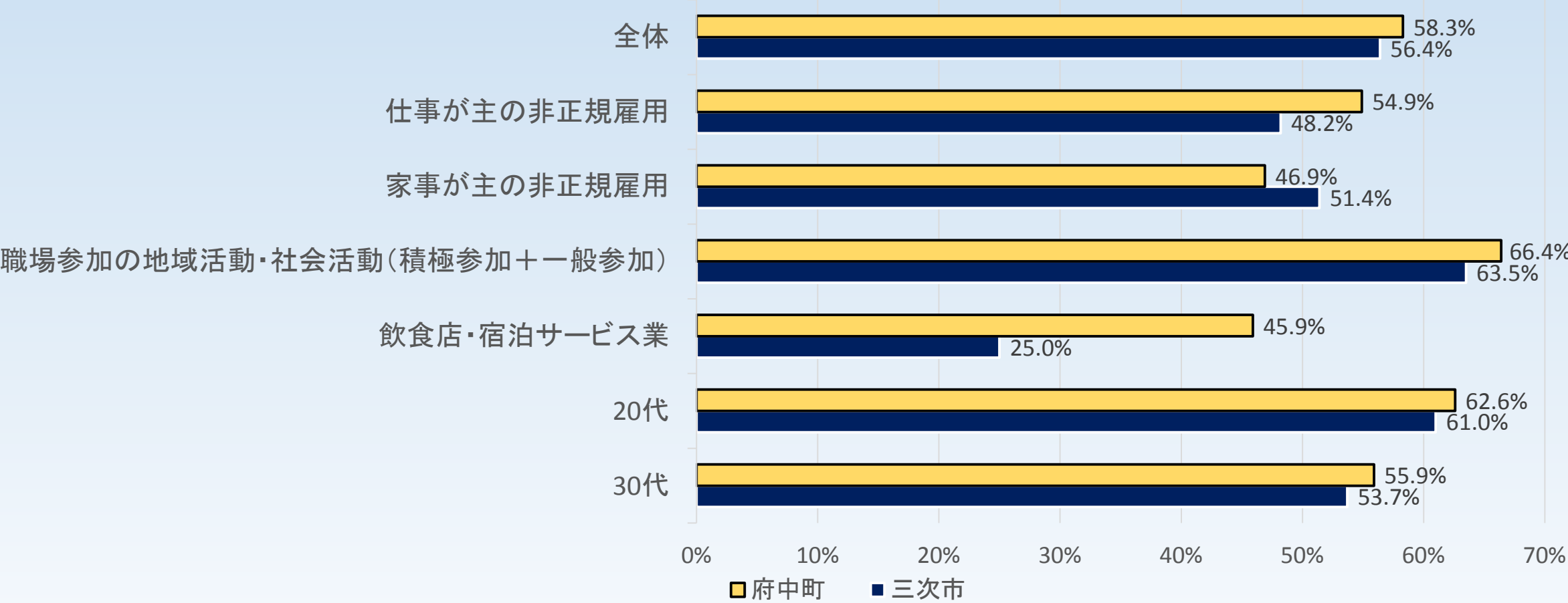
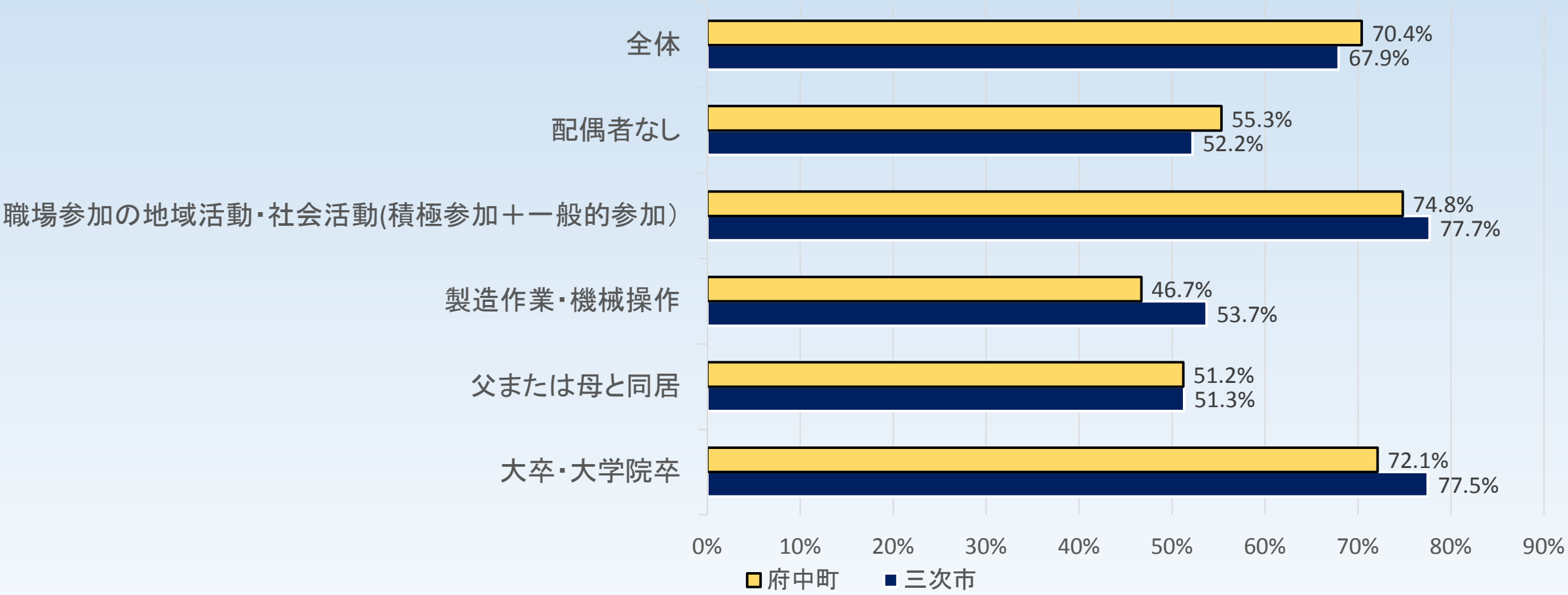
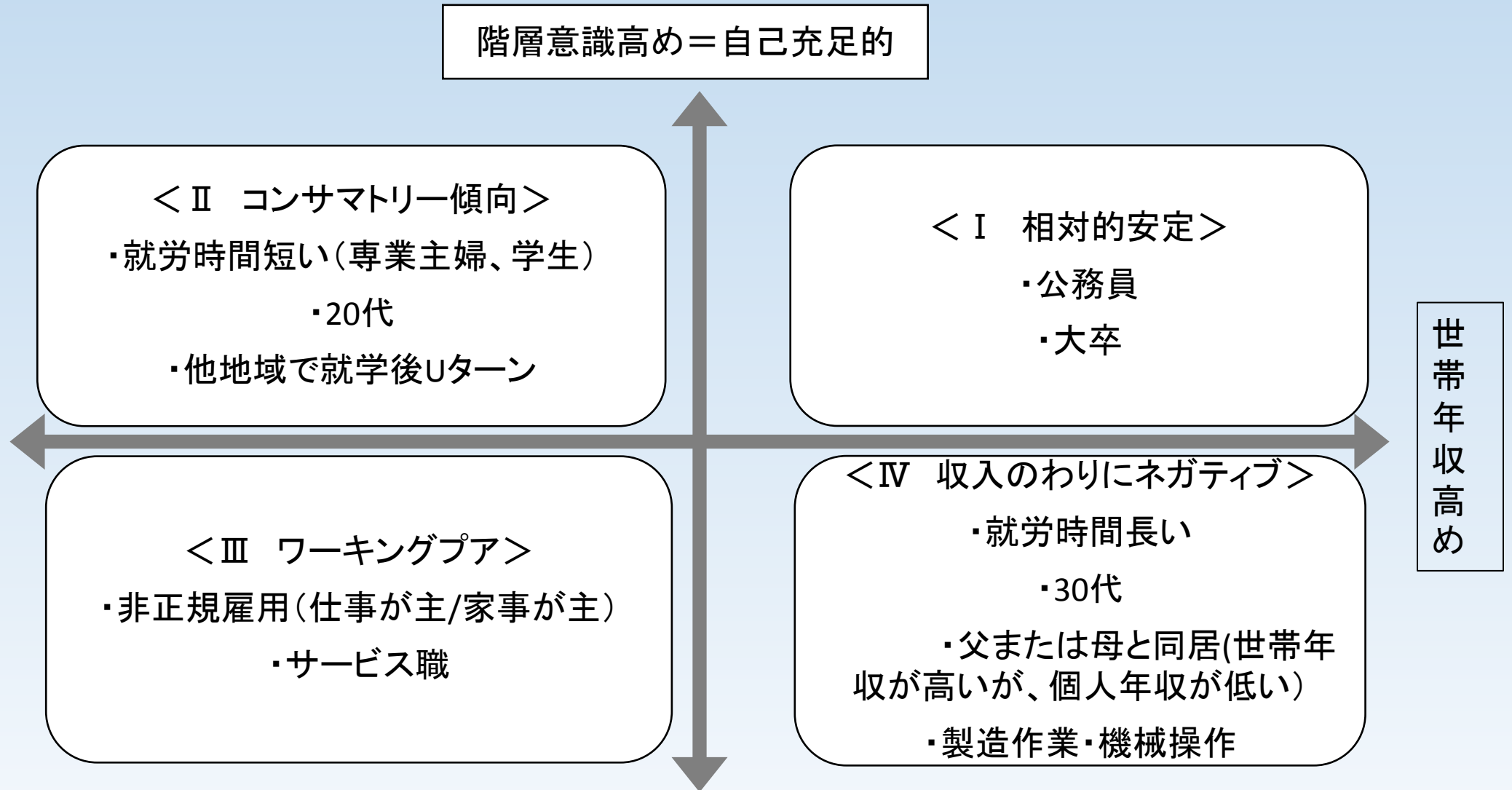


表7ー3 「毎日の生活が楽しいと感じられる」×説明力のある各変数



社会経済的格差と自己充足(コンサマトリー)格差



論点8 地方の若者は「自己充足的」な生き方を志向したダウンシフターの傾向が強いと言えるのか？⇒Yes & No

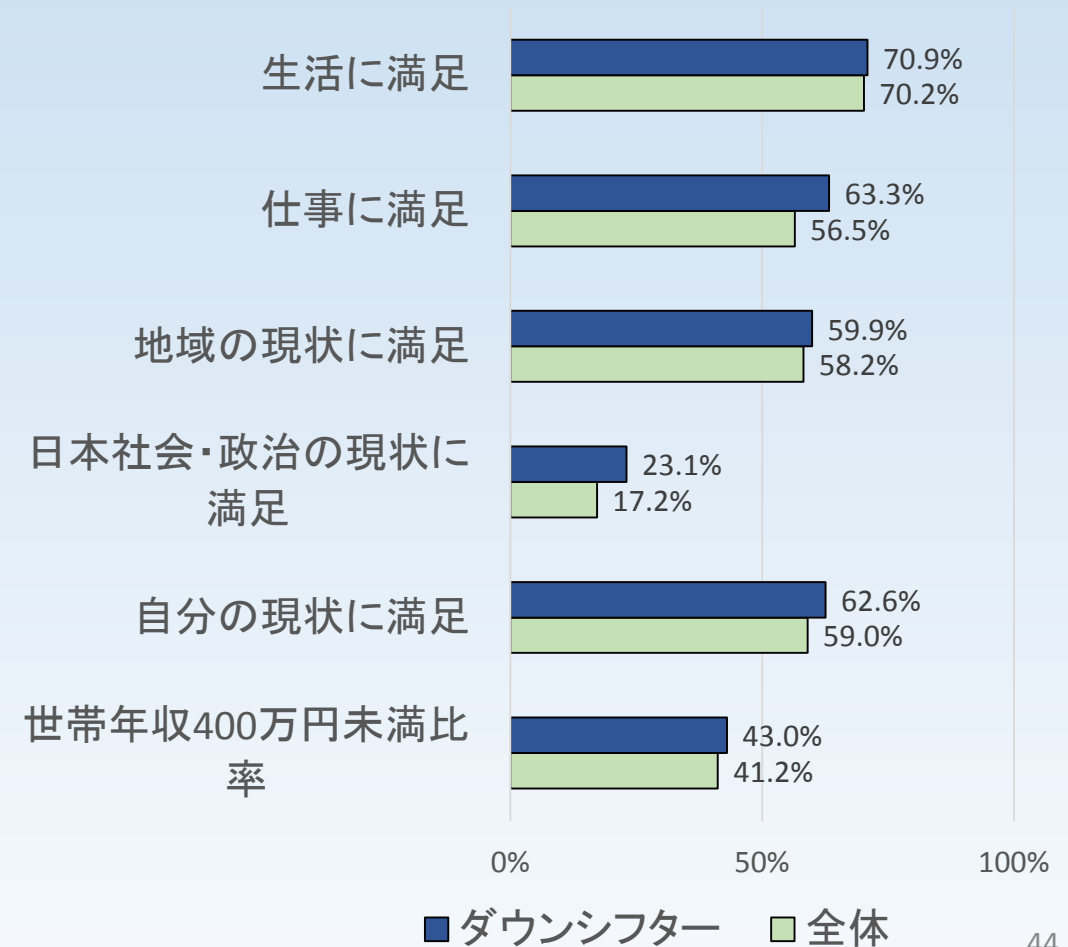
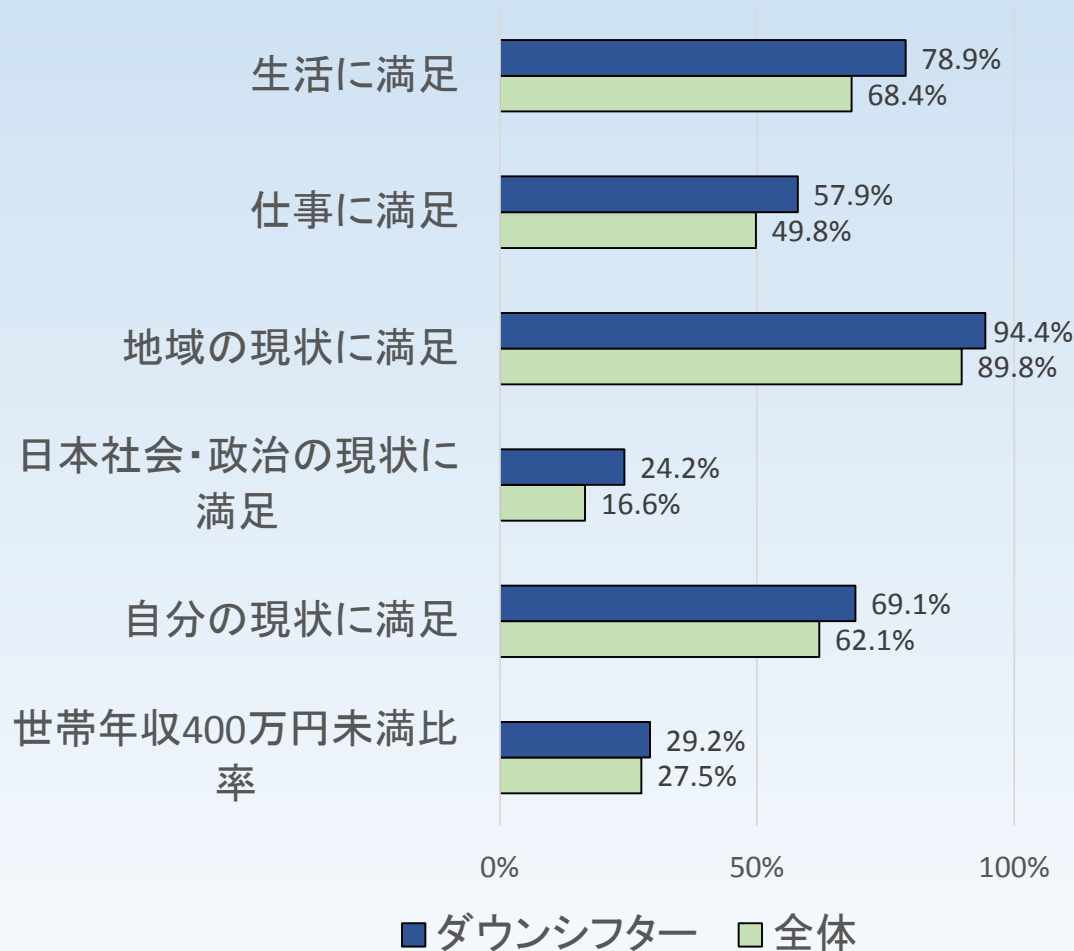
- 経済的にはネガティブな状況でも、人間関係などの生活のクオリティの充足感を相対的に重視するゆえに、現状評価を高く見積もる「自己充足的（コンサマトリー）」な回答傾向が現れている質問項目がいくらかある。
- そして、この自己充足的な回答傾向は、「社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなくても仕方ない」（府中町40.2%、三次市41.1%）という、地方暮らし言説にしばしば登場する「ダウンシフターの価値観」と親和的である。右肩上がりの社会でないことを受け入れている人ほど、各種の総合的な満足度が高いということ（表8－1）
- その一方、「自分なりにお金をかけずに楽しく暮らす方法があるので、今後、生活水準が上がらなくてもかまわない」には府中町21.4%、三次市20.1%の人しか賛同していない。社会経済的に余裕のない多数派は、ダウンシフターにはなりきれないということ。理想と現実の乖離。

表8－1 自己充足的傾向と「ダウンシフター」

～「社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなくても仕方ない」に肯定する人たち(＝ダウンシフター)は、収入が高くないけれども、各種満足度が高い。

府中町

三次市

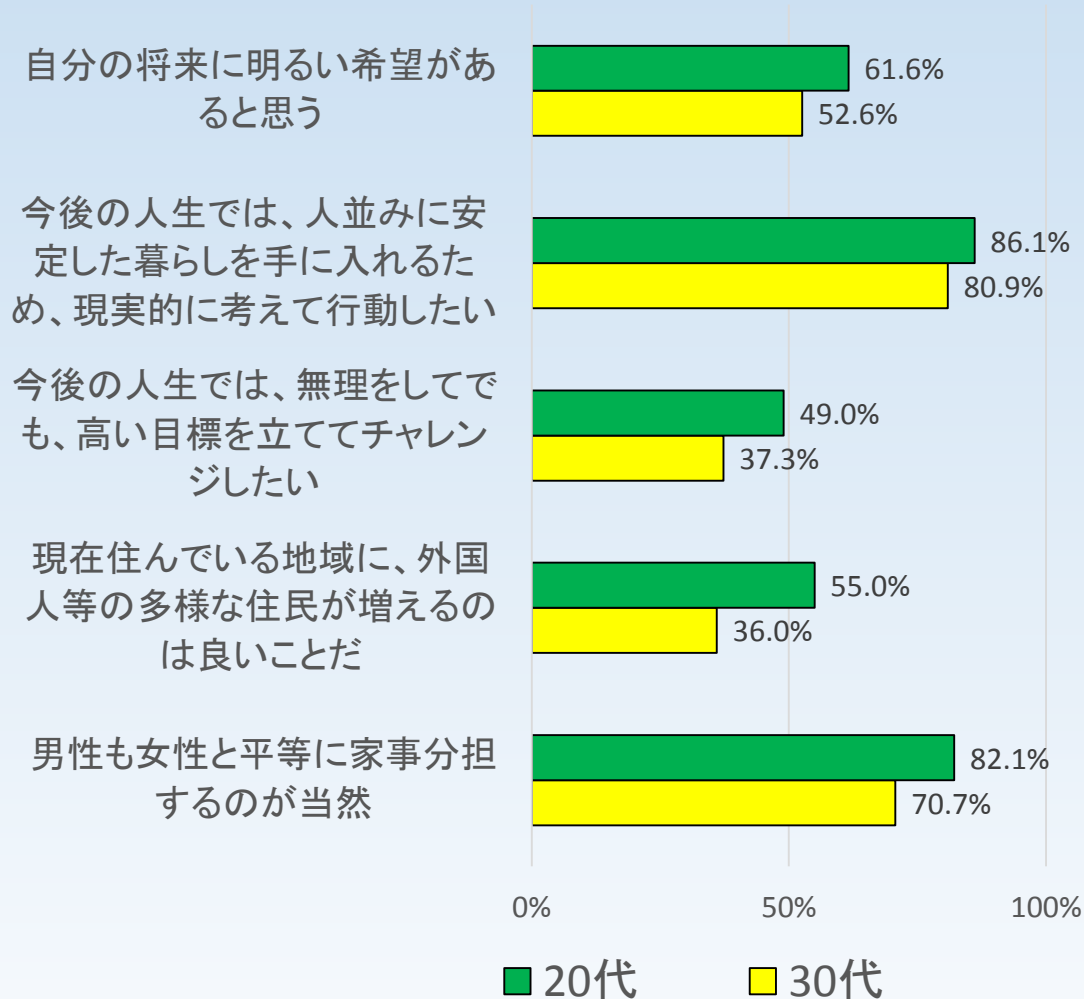


論点9 地方のほうがとくに「保守的」価値観が強いと言えるのか？ ⇒ No, But...

- 全国調査においても指摘されているように、階層と関係なく、20代は30代よりも**金銭感覚は堅実**である(表9-1)。また、就職不安が強いためか、「学生」は他の同世代に比べて、自己実現志向(チャレンジ志向、脱組織志向、個性重視志向)が弱い可能性。その意味では保守的とも言える。
- だが、**政治的な「保守性」がとりたてて目立つわけではない**。「今の日本政府を信頼している」のは府中町19.1%、三次市17.6%のみ。注目したいのは「田舎」である三次市のほうが府中町よりも地域の人口減少に対する危機感が強く、変化を望む傾向が強いこと。男女の平等な家事分担、外国人受け入れについても積極的。
- **20代のほうが30代よりも「自己実現志向」が強く、価値観の保守化の兆候も見られない**。(追跡調査ではないので、年齢・コーホート・時代の効果は区別できないが)

9-1 20代と30代、どちらが保守的？

府中町



三次市

